

東京大学総合研究博物館小石川分館

[建築博物教室](#) 第7回

幾何学のアーキテクチャ——イワン・レオニドフによる新たな建築形態の探求

日時：2015年7月4日(土) 13:30-15:00

講師：本田晃子（早稲田大学高等研究所助教／ロシア建築史）

建築博物教室レポート

建築博物教室第7回は、「幾何学のアーキテクチャ——イワン・レオニドフによる新たな建築形態の探求」と題し、本田晃子先生による講演が行われた。

講演はロシア建築の紹介から始まる。16-17世紀にわたってつくられたモスクワの赤の広場、帝政ロシア時代の大聖堂、ソ連・スターリン政権下によるモニュメンタルな建築、フルシチョフの時代の大衆のための建築と流れを追ったところで、これらとは一線を画したのものとして、今回のメインテーマであるイワン・レオニドフ(1902-1959)の代表作「レーニン図書館学研究所設計案」(1927)、「文化宮殿設計案」(1930)が紹介された。

イワン・レオニドフは1920-50年ごろのスターリン時代に活動した建築家である。この時代初期のロシアでは「ロシア構成主義」と呼ばれる、建築の合理化を目指した潮流があり、レオニドフはそこに端を発してはいるものの、作品のほとんどが **unbuilt**—実現されなかったという変わった経歴をもつ。作品を見ると球や円などの純粋な幾何学形態を用いた設計で、建築設計の重要な要件である敷地の条件を無視することも散見されたようだ。彼は不運によって **unbuilt** となったのではなく、実現されることをはじめから想定していなかったとも考えられ、ロシア建築界では「夢想家」と揶揄されていた。

建築史研究では、実際に建てられたものを研究対象とすることがほとんどであり、**unbuilt** の作家であったレオニドフは議論の対象とはされてこなかった。しかし、本講演ではここに対し「建てる」以上の意図を持っていたのではないかという仮説を立て、ドローイングを丁寧に読んでいくことでレオニドフの建築思想を紐解いていく。そのキーワードが、講師自らが見つけた本講演のキャッチコピー「眼と革命、眼の革命」にある「眼」「革命」である。

まずはレオニドフの特異性を軸に話題が展開された。彼が建築界に入った頃に所属したロシア構成主義は、社会主義国家を産んだ十月革命(1917)に始まる。それまでの資本主義に基づくヨーロッパの伝統とは異なる形態を、社会主義の体制や理念のもとでつくることで、社会主義国家における「社会主義的な生活」を実現するための建築・都市の設計を志向した流派であった。しかしその中でレオニドフはコンペティションの条件を度外視し、純粋な幾何学形態を多用したドローイングをしばしば描いており、構成主義の掲げる「合理性」とはかけ離れた作風から、「夢想家」として批判されることとなる。

講演では、ここでレオニドフの作品に表現された建築や都市のイメージの背後に、「既存の建築概念から離れ、新しい視点から世界を見ることで、新しく建築することにつながる」という建築思想を見出す。そしてこの「新しい視点」が、彼のドローイングに頻繁に登場する航空機からの「機械の眼」であることを指摘した。1920年代のロシアでは、航空機やカメラの発達に伴い、航空機から撮影した動画を上映することが流行していた。

従来の身体感覚から離れた、上空からの新しい視点から見た大地は、文芸評論家であるヴィクトル・シクロフスキーによって「一様で幾何学的な姿」と表現され、地上からの視点では分からなかった都市や地形の幾何学性が、新たに得られた「マクロな視点」によって露わになったと言える。また、同時期に望遠鏡による精緻な月面写真も撮影されるようになり、レオニドフは無数のクレーターにみられる円という幾何学形態に強く興味を示している。こうして航空工学や視覚工学の発達をもたらした視点によって、見慣れたものを新しく眺めること、また自然物に幾何学的パターンが潜んでいることに気づいたレオニドフは、自然と人為的構造の共通点としての幾何学形態を、建築・都市に積極的に採用するようになる。

1930年代になると、巨大な指導者像や華美なレリーフによる装飾などが施された建築がソ連公式の建築様式となり、ロシア構成主義や合理性が「非人間的」との批判を受けるようになる。このころレオニドフは構成主義を離れつつあったが、幾何学形態を多用する作風に対し「機械の建築」といった強い批判を受けていた。彼はこれを克服するため、有機化への試みとして植物の形態をデザイン指標に選ぶ。植物によるデザインというと1900年代に西ヨーロッパで興ったアール・ヌーヴォーが有名であるが、レオニドフは生物学者のエルンスト・ヘッケル(1834-1919)の著作『自然の芸術造形』を参照した。ヘッケルは、植物を顕微鏡で拡大したいわば「ミクロな視点」から、対称性などによって自然物の形態が幾何学的な「根本形態」に分類されると述べており、これに影響を受けたレオニドフは有機体の形態が幾何学的秩序に基づくことを手掛かりに、「クリミア南岸開発計画」(1935-38)の噴水などの建築設計を行っている。この試みは社会的には認められなかったが、これまでの建築思想を変えることなく有機化を果たそうとしたといえるだろう。

このようにレオニドフは、航空機や顕微鏡といった技術によってもたらされた「眼」の拡張によって、それまでの生得的な眼では得られなかったマクロあるいはミクロな幾何学的パターンを発見した。さらにそれを自然物や有機化という一見矛盾した概念と結びつけるという思想のもと建築・都市のドローイングを生み出していったのである。

講演後にはレオニドフの晩年の構想である「太陽の都」(1945-59)、同時期に活躍したロシア建築家メーリニコフなどが話題となった。またロシア構成主義やレオニドフが建築界に与えた影響として、丹下健三による東京計画(1960)も指摘が及ぶなど、非常に興味深いものとなった。

レオニドフの作品や当時の社会状況から、彼の建築思想を紐解いていく展開は非常に鮮やかであり驚きにみちた講演であった。一方ドローイングや模型といった資料はきちんと保存されていないことが多いという話も伺い、限られた手掛かりからこのような議論が構築されていくことに感銘を受けた。

なお、この講演にあわせ「太陽の都」の模型がアーキテクニカ・コレクションとして常設展示に加わった。レオニドフの素描をもとに立体化されたもので、球体によって表現された太陽が浮んだような姿であるが、レオニドフが魅せられた純粋な幾何学形態による力に触れたような印象を受けた。ぜひご覧いただきたい。

(米村美紀／小石川分館学生ヴォランティア)